

第25回 日中戦争史研究会・議事録

2015年9月26日（土）13:00～16:30 愛知大学名古屋校舎講義棟2階L204会議室

参加者（五十音順、敬称略）

磯村富士男（一般）、今井貞夫（元陸軍少将今井武夫氏三男）、菊池一隆（愛知学院大学）、呉米淑（愛知学院大学大学院）、田中周（愛知大学）、千賀新三郎（一般）、野口武（愛知大学）、白那日蘇（愛知大学大学院）、長谷川満（一般）、馬場毅（愛知大学）、福田哲三（一般）、藤井元博（慶應義塾大学大学院）、堀井弘一郎（東京都立白鷗高等学校教員・日本大学通信教育部講師）、増田喜代三（愛知大学大学院）、水町誠司（愛知学院大学）、森久男（愛知大学）、劉柏林（愛知大学）、渡辺興司（一般）

計18名

報告1：今井貞夫氏（元陸軍少将今井武夫氏 三男）

「人間 汪兆銘と影佐禎昭」

【質疑応答】（司会：森）

森：

今井武夫文書の膨大なデータをもとに汪兆銘と影佐禎昭に関する部分をまとめてご報告されました。いずれも近代日中関係史において非常に重要な役割を果たした人物ですが、彼らについて研究する場合に基礎的な資料が相当かけており、その点を着実に埋めようとする報告であると思います。それではご意見のある方は発言ください。

馬場：

当事者しかわからないお話を面白く聞かせていただきました。いくつか意見と指摘があります。まず年表の1ページ目の「中国ほか世界の主な事件」の1905年の箇所に「中国革命同盟会」とありますが、最近の研究によると「革命」をいれると清朝から弾圧されるので、最初から「中国同盟会」という自称であったようです。次に年表の1925年3月の孫文の遺書を代筆したのが汪兆銘であることは山田純三郎も同じことを書いており、ここは資料との一致から事実であると思います。最後に汪兆銘の評価について、彼は「和平・反共・救国」ですから、蒋介石及び共産党の合作時は「抗戦・救国」です。1930年代の終わりから40年代の初めにかけて二つの大きな路線対立がありました。ただし結果的に汪兆銘は傀儡政権・漢奸と評価されてしまう。一方、最近では日本国内でも協力政権と中立的に考える傾向がかなり大きな力を持っており、我々日本人が汪兆銘政権を述べる際には、傀儡と言えるか否か中立的に評価する必要があると考えます。しかし私の実感ではおそらく中華世界の文化的伝統においては、後世でも汪兆銘の評価は変わらないかもしれない。それと日

本は一線を画すべきと思います。

今井：

売国奴といえば私欲に走る悪漢を想像するが、漢奸はニュアンスが違うのではないかという印象です。ただ汪兆銘は金銭的には綺麗でした。影佐さんもそうです。

堀井：

今日のご報告は人間汪兆銘に着目されており、汪兆銘に関する論文や文章ではその人間的側面に触れるものがほとんどないため大変勉強になりました。彼の誠実さや愛国心の強さというものを、汪兆銘政権の本質を問う一側面と捉えて迫ることはとても大事ですが、一方で彼が客観的に歴史の中でどのような立ち位置を占めていたか考える事も大事です。上坂冬子さんが『我は苦難の道を行く』の中で汪兆銘のご子息にインタビューされていますが、二男か三男は父を全く評価していません。そういう評価が親族から出てくるのも一つの側面でしょう。汪兆銘の研究については『多角的視点から見た日中戦争』で三好章先生が詳しく先行研究をまとめておられます。その中で汪兆銘、今井、影佐は共に和平工作を行ったが、結局日本の中央の方針が変わってはしごを外された形になった事が紹介されています。またレジュメの中で江藤淳さんの言葉を引用されていますが、彼らの事を我々がきちんと検証しなくてはならないと考えます。日本が汪兆銘をはじめとするたくさんの人々をいわゆる親日政権、傀儡政権として育てて、結局はその人たちを漢奸として、戦後の過酷な運命にさらしてしまうという面も見する必要があります。いわゆる傀儡政権としての客観的立ち位置も見つつ、革命史観的な視点で終わらない、様々な視点で見る事が大切と考えます。

今井：

汪兆銘の長男は父親を、清廉潔白で優れた人物として評価しますが、政治家としては失敗者であり、認めることはできないと厳しい言葉で語っています。一方で娘は父を好意的にも捉えており、汪兆銘には分かりにくい部分があります。

張：

いくつか質問があります。まず影佐とアヘン販売・流通の関係についてお聞かせいただきたい。

今井：

詳細は年表の1938年1月の箇所に記載しています。

張：

次に、満州に派遣された将校たちは対支一撃論に関してどのような考えを持っていたのでしょうか。

今井：

満州の事は知りませんが、盧溝橋事件が生じたときに面白いことが起きたねと述べた人がいたとは聞いています。ただし関東軍の事は、私は存じません。

張：

盧溝橋事件の後の今井武夫さんのご意見はどうだったのでしょうか。

今井：

今井は不拡大です。7月11日に停戦交渉を成立させたのは私の親父です。むしろ遠藤三郎さんの方が拡大論者であったかと思います。

張：

今井武夫さんは当時の陸軍内部の中でどの派閥にいたのでしょうか。

今井：

父はどちらかと言えば皇道派ではなく、統制派に近いと思います。

張：

権力闘争の面から汪兆銘をみればどうなるのでしょうか。

今井：

汪兆銘と蒋介石がライバルであったことは確かで権力闘争がありました。夫人の陳璧君が漢奸裁判の際に、汪兆銘が日本の傀儡ならば、毛沢東はソ連の犬で、蒋介石は英米の犬であると堂々と述べていますが、権力闘争はどこにでもある話です。ただ蒋介石はテロを用いて汪兆銘の暗殺を考えましたが、汪兆銘は冷酷さが足りなかったかもしれない。

菊池：

汪兆銘も辛亥革命のときにテロを計画して失敗しており、結構激しいです。またマレーシアについて、マレーシアは1963年までなくて以前は英領マラヤでした。1948年にマラヤ連邦として独立して、1963年にマレーシアとして独立している。したがって戦時中にはマレーシアはありません。次に名古屋大学医学部に汪兆銘を研究した資料があります。陳璧君と汪兆銘が植えた桜の木も残っています。それから私は汪兆銘の政権は全くの傀儡政権と考えています。

最後に、汪兆銘自体は確かに立派な人物と思います。実際にシンガポールを日本が占領した時に汪は日本に文句を言います。イギリス人よりも現地を圧迫している日本軍の実態に対する不満を山ほどもらしています。日本最良であるゆえに、一生懸命に日本に対して苦言を呈しています。したがって、汪兆銘を考える場合に時期を分ける必要があると考えます。傀儡的な時期と協力しようとしたが日本がそれを許さない時期があります。この時期ごとに問題を分析するべきと考えます。また重慶脱出後に汪兆銘は、雲南軍閥龍雲（モンロー主義）を説得して力を借りて蒋介石に対抗しようとし、しかし龍雲は日本に利用されると警戒している。おそらく雲南軍閥、そして西南軍閥の動きもみる必要があります。

森：

多くの興味深い問題が指摘されました。私は9月14日から17日まで台北の中央研究院近代史研究所で開催された日中戦争史の討論会に参加してきました。そこに北京の社会科学院近代史研究所から30代の若い女性が出席して、汪兆銘と汪兆銘政権に関する報告をしました。彼女の話では汪兆銘は漢奸でどうしようもない人物ではなく、もう少し多面的・客観的に研究しなければならないが、中国ではそのような研究をしても発表の場がないと話していました。中国大陸でも多様な見方をする研究者が出てきている事を確認する事が出来まして、これが将来プラスの方向に働くことを期待します。

森：

最初の報告は以上とします。

報告2：藤井元博氏（慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程）

「日中戦争期の国民政府軍中央と雲南軍指導部との関係：1940年までを中心に」

【質疑応答】（司会：森）

森：

今日は雲南軍が日中戦争の中でどのような変遷を遂げたのかということを作戦史という視角を明示的に取り上げてその流れを説明されたと思います。このような作戦史を研究テーマとする人は極めて少ないです。軍事オタク的な内容は個人的に好きですが一般的には少ない研究と言えます。

藤井：

軍事オタク的にならないようには気を付けています。本研究の位置付けとしては、地方勢力という存在、地方を横断する軍閥勢力が、なぜ戦後の新中国が成立する時期にほとん

ど動きが見られないかを考えた際に、日中戦争や1930年代には既に地方を横断する力が無くなっていたのではないかという疑問があります。その際に日中戦争の位置付けを考える上で、実際の戦争の局面で実証を試み、作戦史という方法を使ったわけです。

増田：

私は雲南の少数民族や滇越鉄道について調べたことがあります。まず龍雲について、彼の出自は少数民族イ族で納吉鳥梯というイ族名を持っていて、地方勢力を糾合していきました。私の調べた資料では、彼は抗日戦争期には中国専区陸軍総司令部副総司令であったと書かれていました。しかしご紹介いただいた資料の記載では、副総司令から役職が上がっていると捉えましたが、副総司令の立場はあったのでしょうか。次にレジュメの2頁にある滇越鉄道について、昆明からハノイ、ラオカイ、沿岸のハイフォンへとつながっていて、そこから香港に至り、フランス資本でありながらイギリスの商品がたくさん雲南に届いたことが東亜同文書院の資料にみられます。また鉄道建設にあたっては、雲南大学の資料に建設過程の苦難の様子などが詳しく描かれていました。1910年の鉄道開通直後に東亜同文書院の第七期生が大旅行で、香港からハイフォン、ラオカイ、昆明、四川を調べて調査を行っています。その中心が米内山康夫で『雲南四川踏査記：滇越鉄道をゆく』（1940年）で鉄道の様子を詳しく書いています。

藤井：

雲南研究はまだ進めておりませんのでありがたいご指摘でした。龍雲の点に関しては、副総司令の地位であったか私は存じません。第一集団軍は第六十軍と第五十八軍を足した二個軍を編成したもので、その総司令という意味です。雲南省主席と雲南省昆明行営主任の肩書はあります。例えば白崇禧は副参謀総長という肩書を持っていましたが、そうした肩書きが龍雲にあったか私は見たことがありません。それからもう一つ、龍雲の出自に関しては様々な研究があり、例えばオーストラリアのHallの研究に記載があります。1999年の潘の文献でも、龍雲のイ族に対する統治体制についても研究されています。人類学の方に聞いてみると、龍雲政権をイ族の政権としてみるのはいかほど正しいのか怪しいです。例えば龍雲のテクノクラートの中にペー族が非常に多いです。イ族も龍雲に服属している人が多いか否か疑問があります。南部のイ族が多い地域でも土司の反乱が多発しています。100%の統治が及んでいるというよりも、アヘンなどのうまみを与えて、やくざの親分として分け前を与えることで統治していたといえます。最後に鉄道の件について、ハノイからハイフォンまでは鉄道だったか記憶が定かでないのですが、ハイフォンまで鉄道が開通していたのでしょうか。

増田：

ハイフォンから鉄道を作りはじめたのです。

森：

副総司令というポストは確かに存在していました。例えば第二専区の第七集団軍の副総司令は劉汝明でした。いずれにせよ調べれば技術的にわかる問題であると思います。

菊池：

私の記憶では雲南省は23か25の少数民族で形成されていて、イ族が50数%とすごい力を持っています。ですから他の少数民族を政権に入れているからと言って、イ族の一元支配でないとは言い切れないと思います。もう一つ白崇禧問題ですが、彼は回民です。つまり雲南では少数民族を抑える必要があり、反蔣的意識を持つ龍雲や白崇禧をいかにして抗日戦争に参加させるのかが問題です。この辺を押さえた方が良いでしょう。少数民族の視点が入っていないのです。次に自立の問題ですが、雲南紙幣が最後まで根強く流通していた場所です。独自に貨幣を作り上げて中央に経済的に抵抗している。どうしても雲南を手に入れたという考えが蒋介石にはありました。それから軍事的には、雲南には抗日戦争期に唯一飛行機製造工場があった場所です。独自の空軍を持っています。ですから位置・地域性を考える必要があります。最後に、雲南省立図書館や雲南大学に膨大な資料があります。防備が堅くて、特に档案馆はなかなか資料を見せてくれませんが、山のように見るものがありますよ。財政や軍人の数などをみないといけません。

藤井：

雲南の少数民族問題につきまして、本報告では龍雲と蒋介石の政治力学の中で雲南系と中央の関係が決まっているという議論への反駁を試みたわけですが、少数民族関係は非常に重要ですが、少数民族に基盤を置いているから反蔣的であるわけではないと思います。例えば白崇禧は蒋介石に協力的でした。

菊池：

それは1936年以降の話で妥協の結果です。少数民族政策を蒋介石はかなり意識しています。蒋介石の動きのほとんどは龍雲をいかに打倒するかにかかっているのです。だから龍雲をわざわざベトナムに派遣して、日本軍の武装解除にあたらせている間にクーデターを起こさせるのです。蒋介石は1945年から46年までは龍雲を倒そうと思っています。

藤井：

私はそうはみていません。蒋介石は非常に政局で動いています。相手が強い時は決してつぶしにかかりません。蒋介石のやり方はかなり強引に見えて実はそうでなく、弱体化したものに政治的プレッシャーをかけて動いていきます。その一つの表れが1945年のクーデター事件であったと思います。最初は龍雲に対して様々な配慮をしながらも、経済的圧力

をかけて協力させようとはしますが、急に最後の段階で手荒な真似をしていることが不思議でもあります。蒋介石は最初から龍雲の打倒を考えていたわけでないと思います。

菊池：

しかし龍雲の方はいつかやられるという危険性を感じていました。それから例えばレジュームの5頁に西南戦線拡大に対する認識の話がありますが、これはどうして日本側の資料を使わないのでしょうか。実体としては日本側の戦略問題を出さなければわからないと思います。

藤井：

桂南会戦については、別の歴史学研究的論文で、日本の資料と中国側の資料を使って分析しているので、そちらをご参照いただければと思います。

森：

南寧作戦は確か第五師団の今村均が関係しています。

今井：

台湾混成旅団も関係していますね。

藤井：

その上の第21軍の軍司令官は安藤利吉です。

馬場：

国民政府軍が山東、湖北、江西へと移動していく中で、新兵の徴募をどう行っていたのか質問があります。山東省ですと東北軍も西北軍ももともと山東の地元ではないのです。東北軍は実は補給が得られなくて、日本側の分析ではどんどん疲弊していきます。日本軍と八路軍の圧迫を受け、補給を得られずに結局于学忠は1943年に南に移ります。于学忠軍をみても大規模に新兵補充を行った形跡が見られない。武器援助も蒋介石からほとんど来ていない。ところが八路軍の方はたくさんの武装集団を入れて、政治工作を一生懸命やるのです。戦闘力は龍雲軍に比べてはるかに弱いですが、少なくともリクルートに力を入れています。例えば山東省に1939年3月に115師の343旅686団2000名が陳光と羅榮桓に率いられてきます。344旅は南の方に行きます。その後山東の八路軍(115師と山東縦隊)は1940年末には5万と言っている。この全てが正規軍かはわからないが、八路軍の方は数千の単位で入ってきているが増加している。しかし国民政府軍はどうも大規模に兵隊を補充している節が見られない。ついでに言うと土匪は土匪だけで一部隊を編成します。以上を考えると、政権が安定すれば徴兵をできるかもしれないが、前線を移動している部隊がどのよう

に新兵補充を行ったか伺いたい。例えば農民を無理やりに捕まえたのでしょうか。

藤井：

この資料からだけではわかりませんが、例えば浙江省や湖南省の部隊が入っているのは、おそらく他の部隊の生き残りを集めた可能性があります。また農民を引っ張ってきたともいわれます。四川では徴兵を行っていたことは先行研究で出ていますが、実際に新兵がリクルートされた後にどのように振り分けられていたかは今後の課題とします。

馬場：

総力戦体制が成り立っていたのか疑問です。

藤井：

現地でやりくりしていても、動員は成立していないと思います。

堀井：

鉄道の事をお聞きしたい。9頁に碧色寨までの線路を撤去した話がありましたが、1944年の日本軍のいわゆる一号作戦で南北に鉄道を貫通させるときに、この線路も開通し直したのでしょうか。もう一つは、5頁に汪精衛との関係で、抗戦継続ということで中央との関係を保つわけですが、汪精衛側の誘いを断ったのは李根源の影響なのでしょうか。

藤井：

李根源云々の話は根拠が定かでなく怪しいです。100%信頼のおける資料がなくて確認が必要な情報です。私としては全体的な状況の中で、現実的に抗戦協力を進めたと思います。大部分の部隊を放置して汪精衛側に就くのは現実的ではないとみています。次に鉄道の件ですが、修復はされなかったと思います。

張：

1940年代までの雲南軍と共産党との接触を伺いたいです。

藤井：

そこは非常に重要なポイントです。龍雲が共産党と通じていたという議論は先行研究にあります。実際に龍雲が和平派・民主各派を昆明にかくまっていたのは、共産党との関係が密接であったからと指摘されています。

張：

龍雲と共産党が密接な関係にあったことから見れば、1945年の戦争末期に龍雲が監禁さ

れる結果は繋がると思います。

藤井：

龍雲だけをみれば確かに繋がるように見えるが、蒋介石が長らく手を出せなかったのは、龍雲個人が理由ではなくて、その背後にある鉄道・産業・財政・軍隊を基にした中央に対する雲南の自立性があったからです。龍雲の政治的な行動が共産党と結びついていたからといって、それが蒋介石との対立関係の全体的な構造を決定するわけではありません。共産党との関係は一つの要素にすぎず、雲南地方勢力の軍事力の低下、財政行政に対する中央の介入といった問題の方が重要であると私は考えます。

増田：

さきほどの鉄道の建設とその後の貿易の移り変わりについては、外務省から出ている『雲南事情』があります。アジア歴史資料センターにアクセスすると統計の数字なども詳細にわかりますのでご参考下さい。

藤井：

ありがとうございます。

森：

先ほど回覧された文献ですが、他の同様の資料集ですと蒋介石の作戦命令がたくさん載っています。しかしあの本にはごくわずかししか入っていない。これは蒋介石が当地域を重視していなかったという意味でしょうか。

藤井：

そうではないと思います。1940年の仏印進駐以降は相当に重視しています。中央軍事委員会の幹部レベルの幕僚が集中して投入されます。1941年以降はイギリスとの関係を、雲南を中心に結ぼうと考えています。蒋介石としては西南における抗戦体制を作るうえで雲南を重要視していました。

森：

地域としての重要性はあったにせよ、蒋介石の作戦命令として出てこないのはどのような意味があるのでしょうか。

藤井：

基本的には、前線になっていなかったからではないでしょうか。

菊池：

非常にセレクトされた資料という印象を受けます。

森：

資料集に入れていないのかもしれませんがね。

藤井：

意図的に蒋介石との関係を見せないようにしている可能性があります。雲南省の档案馆や文史資料を出している雲南の政治協商会議の書記の人たちは龍雲政権の生き残りが多いです。したがって政治的に情報を選択している可能性は十分にあります。

森：

3頁の184師長の報告を考える際に、この当時の地方軍閥の将軍たちは必ずしも本当のことを言わない。わざと自分を哀れに見せて戦わなくてよくしたり、援助を要求したりします。蒋介石も本当のことを言わずにきれいごとを言います。ですからこの当時の資料は資料として本物でも、読み方として本当のことを言っているか否かを考える事は重要なポイントです。古くからの将校団がいなくなったということは、部隊を再編できないということです。兵隊はいくらいなくなっても良いが、将校団が残っていなければ再建する元手がないわけです。184師長の言っていることは果たして本当なのか疑問があります。

藤井：

確かにおっしゃる通りです。今後しっかりと考慮したいと思います。

森：

中国におけるこういう文書には読み方があって、一体本音がどこにあるかが重要です。それと、今日は日本軍との作戦に関する報告が多かったわけですが、日本軍の作戦記録と対比させれば、より立体的に浮かび上がってくると思います。雲南軍がたくさんの激戦に参加したといわれるが、全ての作戦で英雄的に戦ったかは別問題です。個々の作戦を確定させるとメリハリのついた研究になると思います。国民党の作戦史もあると思います。

森：

2回目の報告はこれで終わりとさせていただきます。次回研究会の第一候補日は、11月28日とします。

以上